教育諸学研究　第26巻　3－16　2012

原　　著

小学生の死の意識と喪失体験及び自尊感情との関係性について

大　曲　美佐子

本研究は小学校２・４・６年生を対象に，死の意識と死別を伴う喪失体験との関係性について検証するとともに，先行研究「死を考えた体験のある子どもは自尊感情が高い」を立証することである。そこで，アンケート調査を実施した結果は次の３点である。１点目は２・４年生に比べ，６年生の４人中３人が自分の死を考えたことがある。２点目は，２年生の児童は「生き物の死」の体験が，６年生の児童では「身近な人の死」の体験が死の意識とに関係性があるという分析結果を得た。３点目は，ポープの自尊心尺度家族において，「死を考えたことがない子ども」の方が「死を考えた子ども」より自尊感情が高く，有意差が見られた。以上のことより，小学校低学年の児童でもペットロスを感じており，周りの大人はそのことを充分に理解するとともに，適切な対応が求められる。また，先行研究の死の意識と自尊感情との関係性を立証するには，更なるデータの収集と分析とが課題である。

キーワード：人の死　家族の死　自分の死　喪失体験　自尊感情

はじめに

2011年３月11日の東日本大震災では，地震と津波によって多くの人命が失われた。一瞬のうちに肉親や身近な人を亡くした子どもたちがいることを考えた時，特に，精神的自立が十分に図られていない小学生の児童たちは，死をどのように意識し受け止めているのであろうか。赤澤（2006）は，児童の死の概念や死の意識について「子どもの死に対する考え方と発達段階を理解しておくことは必要不可欠であり，子どもの死の概念に関する研究を蓄積することは重要である」として，小学校１年生から６年生の児童585名（有効回答数）を対象に質問紙による調査を実施した。その結果，死の不可避性の質問項目に関して「各項目で約90％以上の児童が死は誰にでも訪れ，避けられないものであると答えており，年齢群による有意差は見られなかった」と報告している。しかし，児童が死の不可避性について理解していることと，身近な人に死なれるという喪失体験あるいは悲嘆の体験とは次元が異なるものである。悲嘆の体験ということについて言えば，得丸（2005）らが，小・中・高等学校の児童・生徒を対象に「悲嘆を伴う死別に関する意識調査」を実施している。その調査結果によると，半数を超える６割の児童・生徒がなんらかの悲嘆を伴う死別をすでに体験しており，特に小学生の多くが悲しみを伴った死別体験をしているという結果を得ている。さらに，得丸らは小学生はペットとの

死別体験が最も多く，「いのちの教育」でペットロスに触れることの意義の大きさについて言及している。

研究課題

本研究は小学生を対象に，死の意識と死別を伴う喪失体験との関係性について検証するとともに，先行研究の「死を考えた体験のある子どもは自尊感情が高い」という結論を立証するため，研究課題１～３を設定した。ここで使用する自尊感情並びに自尊心とセルフエスティーム（Self-Esteem）とは同意義で使用し，死を認識し意識することを「死の意識」と記述する。

研究課題１．死の意識及び死別に伴う喪失感の調査

小学校２・４・６年生を対象に，発達段階における「死」のとらえ方の変容を調査する。ここでは「死」のとらえ方を，３人称の「人の死」，２人称の「家族の死」と１人称の「自分の死」とに分類する。さらに，死別による喪失感については，死を「生き物の死」「身近な人の死」に分け，児童の発達段階においてどのような傾向が見られるかを，児童が自由記述した内容の分析から調べることにする。

研究課題２．死の意識と喪失体験との関係

小学校２・４・６年生を対象に，「人の死」「家族の死」「自分の死」という死の意識を目的変数に，「生き物の死」「身近な人の死」の喪失体験を説明変数として，２つの変数間のクロス表に独立性の検定を行い，変数間の関連性について確認する。そこで，独立性の検定として，次の仮説を設定する。

仮説１「『生き物の死』を体験した児童ほど『人の死』『家族の死』『自分の死』を考えたことがある」

仮説２「『身近な人の死』を体験した児童ほど『人の死』『家族の死』『自分の死』を考えたことがある」

自由記述の質問項目においてペットとせず生き物としたことについては，「ペットの死」とした場合には，犬や猫などに限定されがちであることが考えられる。特に，小学校低学年にとって生き物を飼う，または育てる対象は金魚やハムスターなどのもっと小さい生き物ではないかと考えた。自分でえさをやり，育てるという行為こそが喪失感へと繋がるものととらえ，生き物との死別とした。また，「身近な人の死」という質問項目の設定理由は，児童に喪失感を与えるのは必ずしも２人称（家族）の死の体験だけではなく，親戚の人や親しくしている近所の人であることも考えられるからである。

研究課題３．先行研究「死を考えた体験がある子どもは自尊感情が高い」の検証

小松（2003）が，平成10年に都内の小学校６年生673名を対象に「いのちの誕生と死を考える体験」と「自尊感情」との関連について，７つの質問項目からその関係性を『いのちの教育』で論じている。そこで，ここでは，小松の「死について考える体験の有無と自尊感情との関連」について，「死を考える体験がある児童とない児童を比較したところ，やや差が認められた」という小松の導き出した結

論を検証することを研究の目的とする。その理由として，小松は作成した質問項目の信頼性についての検証及び仮説を立証するための統計分析処理について述べていないため，本研究では，小松が作成した質問項目とそれらの項目に関連した自尊感情尺度として，自分と家族について取り扱うことにした。自分についての自尊感情の測定には，ローゼンバーグ（Rosenberg, M.）の全般的セルフエスティーム尺度を，家族についての自尊感情の測定はポープ（Pope,A.W.）らの子ども用 5 領域自尊心尺度（Five-Scale Test of Self-Esteem for Children）の家族の邦訳版を使用する。測定値は 4 件法を用いてデータの算出を行う。ただし，小学校 2 年生には質問項目の理解が難しいと判断し，4 年生と 6 年生を対象に行った。さらに，小松の調査では，死の意識を「死について考える体験」ととらえ，「人の死」だけで調査をまとめているが，本研究では死のとらえかたについて，3 人称の死を「人の死」，2 人称の死を「家族の死」，1 人称の死を「自分の死」に分けそれぞれについての質問項目を設定する。解析にあたっては，一元配置分散分析を用い，従属変数に「小松の自尊感情尺度の項目」「Rosenberg 全般的セルフエスティーム尺度」「Pope 自尊心尺度『家族』」を，因子は 1 つでそれぞれ「人の死」「家族の死」「自分の死」として，「はい」「いいえ」あるいは「ある」「ない」の 2 水準である。

研究方法

本研究は上記の研究課題を基に，小学校 2・4・6 年生を対象に死の概念を細分化して死に関する意識調査を実施した。調査内容は大きく分けて次の 3 項目である。1 点目は，死を 3 人称（人）の死，2 人称（家族）の死，1 人称（自分）の死ととらえ，それぞれについての質問項目を設定した。2 点目は，自分が飼っていた生き物の死や身近な人が亡くなった時の悲嘆状況について自由記述することである。3 点目は，小松の「死を考えた体験がある子どもは自尊感情が高い」という先行研究の検証である。検証方法には，小松が作成した自尊感情尺度以外にも，自尊感情を測定するときに使用されるローゼンバーグ（Rosenberg, M.）の全般的セルフエスティーム尺度及びポープ（Pope,A.W.）らの子ども用 5 領域自尊心尺度の家族の邦訳版を使用し，4 件法を用いてデータの算出を行った。ただし，小学校 2 年生には質問項目が難しいと考え，4 年生と 6 年生を対象に実施した。

1．調査方法

調査方法は，K 市立 A 小学校の 2・4・6 年生を対象に，各学級担任が実施者となり自己記入式の質問項目を無記名で実施し，その時間内で質問紙を回収した。実施の統一性を図るために調査実施者用手引きを作成し，指示内容以外の説明を行わないように求めた。データ収集の実施日等は表 1 に示す。調査内容は，2・4・6 年生を対象に「死に関する調査項目」，4・6 年生を対象に「小松の自尊感情尺度の項目」「Rosenberg 全般的セルフエスティーム尺度」及び「Pope 自尊心尺度『家族』」とした。

表１　調査Ｋ市立Ａ小学校

学年	人数	実施日
2年	228名	2009年12月22日～24日
4年	198名	2010年10月8日
6年	186名	2010年10月5日～14日

２．調査内容

（１）本研究の死の意識に関する調査項目は表3に示すとおりである。表4は，先行研究の小松の自尊感情尺度である。測定値は5件法を用い，「そう思う」5点，「どちらかと言えばそう思う」4点，「どちらとも言えない」3点，「どちらかと言えばそう思わない」2点，「そう思わない」1点である。

（２）表5は，ローゼンバーグ（Rosenberg, M. 1965）の全般的セルフエスティーム尺度を示す。反転項目は，２，５，６，８，９である。表6は，ポープ（Pope, A.W.）らの子ども用5領域自尊心尺度（Five-Scale Test of Self-Esteem for Children）のうち，家族の自尊心尺度10項目を示す。反転項目は，３，４，８，９，10である。それぞれ4件法を用い，測定値は「よくそう思う」4点，「ときにそう思う」3点，「あまりそう思わない」2点，「ほとんど思わない」1点とする。

表３　死に関する調査項目

１．①人はいつかかならず死ぬと思いますか。
　　②それはいつですか。
２．①かぞくがいつか死ぬと考えたことがありますか。
　　②それはいつですか。
３．①じぶんがいつか死ぬと考えたことがありますか。
　　②それはいつですか。
４．(1)かっていた生き物が死んだことがありますか。
　　(2)そのときのあなたの気もちをおしえて下さい。
５．(1)いままでにあなたのまわりの人がなくなったことがありますか。
　　(2)そのときのあなたの気もちを教えてください。
　　(3)家の人となくなった人のことを話すことがありますか。
　　(4)そのときのあなたの気もちをおしえて下さい。

表４　小松の自尊感情尺度の項目

１．家庭の生活は楽しい。
２．自分を大切に思ってくれている人に支えられている。
３．学校の生活は楽しい。
４．目的に向かってがんばる。
５．自分がすき。
６．自分の意見がはっきり言える。
７．友だちにたよりにされる。

表５　Rosenberg 全般的セルフエスティーム尺度

１．私は　すべての点で自分に満足しています。
２．私は　自分が全然だめだと思います。
３．私は　自分にはいくつかの長所があると思います。
４．私は　みんなができるくらいにはいろいろなことができると思います。
５．私には　あまり得意に思えることがありません。
６．私は　自分が役にたたない人間だと思います。
７．私は　自分が少なくとも他の人と同じくらいは価値ある人間だと思います。
８．私は　もう少し自分を尊敬できたらと思います。
９．私は　自分をよく失敗する人間だと思います。
10．私は　自分の良い面に目を向けるようにしています。

表６　Pope 自尊心尺度「家族」

１．私は　家族の大切な一員です。
２．私は　家族といっしょにいるときとても楽しい気持ちです。
３．私は　家を出ていきたいです。
４．私のせいで　親は不幸です。
５．私は　よい子どもです。
６．私は　親が私のことをほこりに思うようなよい点を持っています。
７．私の家族は　とてもすばらしい家族です。
８．私の家族は　私にがっかりしています。
９．私が 今の自分ともっとちがっていたら私の親は幸せだろうと思います。
10．私は　家族といっしょのときの自分の行動が好きではありません。

3．分析方法

分析には統計パッケージ SPSS18.0J　for Windows　を使用し，クロス集計でカイ二乗検定，一元配置分散分析を行った。

研究結果

研究課題１　死の意識及び死別に伴う喪失感の調査

表７　小学校２・４・６年生を対象にした死に関する調査　集計結果　N=612

質問内容	2年生　N=228			4年生　N=198					6年生　N=186						
設問１①人はいつかかならず死ぬと思いますか。	はい N=205	いいえ N=23		はい N=164	いいえ N=34				はい N=163	いいえ N=23					
②それはいつですか。				小学校前	小1	小2	小3	小4	小学校前	小1	小2	小3	小4	小5	小6
				53	23	38	38	9	41	15	20	27	20	29	6
設問２①かぞくがいつか死ぬと考えたことがありますか。	ある	ない	無回答	ある	ない	無回答			ある	ない	無回答				
	106	121	1	86	110	2			107	79	0				
②それはいつですか。				小学校前	小1	小2	小3	小4	小学校前	小1	小2	小3	小4	小5	小6
				9	11	27	30	8	7	10	9	16	25	22	11
設問３①じぶんがいつか死ぬと考えたことがありますか。	ある	ない	無回答	ある	ない	無回答			ある	ない	無回答				
	126	101	1	115	82	1			138	48	0				
②それはいつですか。				小学校前	小1	小2	小3	小4	小学校前	小1	小2	小3	小4	小5	小6
				15	21	27	35	26	4	15	12	23	29	32	16
設問４(1) かっていた生き物が死んだことがありますか。	ある	ない	無回答	ある	ない	無回答			ある	ない	無回答				
	170	57	1	156	42	0			141	45	0				
(2) そのときのあなたの気もちをおしえて下さい。	回答	無回答		回答	無回答				回答	無回答					
	172	56		149	49				133	53					
設問５(1) いままでにあなたのまわりの人がなくなったことがありますか。	ある	ない	無回答	ある	ない	無回答			ある	ない	無回答				
	124	103	1	131	64	3			132	53	1				
(2) そのときのあなたの気もちをおしえて下さい。	回答	無回答		回答	無回答				回答	無回答					
	117	111		120	78				114	72					
(3) 家の人となくなった人のことを話すことがありますか。	ある	ない	無回答	ある	ない	無回答			ある	ない	無回答				
	57	138	33	49	117	32			61	93	32				
(4) そのときのあなたの気もちをおしえて下さい。	回答	無回答		回答	無回答				回答	無回答					
	59	169		43	155				61	125					

※１．２年生対象の事前調査は　2009年12年22日～24日に実施
※２．４年生対象の事前調査は　2010年10月８日に実施
※３．６年生対象の事前調査は　2010年10月５日～14日に実施

小学校２・４・６年における表３の質問項目の集計は表７，８に示す通りである。設問１「人はいつかかならず死ぬと思いますか」に対して，「はい」と回答した２年生は205名（89.9%），４年生164名（82.8%），６年生163名（87.6%）である。各学年ともほぼ90%に近い数値であった。そこで，３つの学年に差異があるかどうかを調べるためにカイ二乗検定をすると有意差は見られなかった（χ^2=4.870 df=2 0.05<p<0.1)。設問２「かぞくがいつか死ぬことを考えたことがありますか」に対して，「ある」と回答した２年生106名（46.5%），４年生86名（43.4%）といずれも50%を下回っていたが，６年生は107名（57.5%）と６割に近い値であった。カイ二乗検定を行ったところ，有意差が見られた（χ^2=8.05 df=2 p<0.05)。残差を見ると，６年生が２・４年生より「家族の死」を考えたことがある児童が多いといえる。設問３「じぶんがいつか死ぬと考えたことがありますか」に対して，「ある」と回答した２・４年生はいずれも50%台であったが，６年生では138名（74.2%）と４人の内３人は自分の死について考えたことが覗える。次に，３つの学年でカイ二乗検定を行ったところ，有意差が見られた（χ^2=16.9 df=2 p< 0.01)。残差分析を行ったところ，２・４年生より６年生の児童の方が自分の死を考えたことが多いといえる。設問４「かっていた生き物が死んだことがありますか」に対して，２・４・６年生とも75%前後の児童が「ある」と回答している。犬や猫以外にハムスター・金魚・カブトムシなどを飼っており，生き物が死んだときの気持ちについて質問したところ，「悲しい，さみしい，くやしい」という記述が多く見られた。なかでも「ちゃんと世話をしていればよかったのに」など自責の思いを綴った内容は２年生で16名（７%），４年生41名（20.7%），６年生44名（33.1%）であった。４年生が記述した自責の思いを表８にまとめた。設問５（１）のまわりの人がなくなった体験は学年を追うごとに，その比率が高くなっていることが見られた。設問５（３）について，まわりの人を亡くした体験をした２年生は124名中57名（46%），４年生は131名中49名（37.4%），６年生は132名中61名（46.2%）が「家の人と亡くなった人についての話をする」と回答している。

研究課題２　死の意識と喪失体験との関係

小学校２・４・６年生を対象に，仮説１「『生き物の死』を体験した児童ほど『人の死』『家族の死』『自分の死』を考えたことがある」，仮説２「『身近な人の死』を体験した児童ほど『人の死』『家族の死』『自分の死』を考えたことがある」を検証する。クロス集計で分析し，カイ二乗検定した結果を表９に示す。仮説１について，２年生では，「生き物の死」を体験した児童は「人の死」（χ^2=4.59 df=1 p< 0.05)，「家族の死」（χ^2=4.70 df=1 p< 0.05)，「自分の死」（χ^2=6.11 df=1 p< 0.05）で有意差が見られることから，仮説１は支持された。この結果と残差を見ると，「生き物の死」を体験した児童はしなかった児童よりも「人の死」「家族の死」「自分の死」ということを考えたことがあるといえる。４年生では「生き物の死」を体験した児童は「家族の死」（χ^2=12.5 df=1 p<0.01)，「自分の死」（χ^2=7.04 df=1 p<0.05）で有意差が見られることから，「生き物の死」を体験した児童は「家族の死」「自分の死」を考えたことと関係があることが支持された。この結果と残差を見ると「生き物の死」を体験した児童はしなかった児童よりも「家族の死」「自分の死」をよく考えたことがあるといえる。６年生では「生き物の死」を体験した児童は，「人の死」（χ^2=0.662 df=1 p>0.1)，「家族の死」（χ^2

表８　小学校４年生を対象に「かっていた生き物が死んだときの気持」を記述した149名のうち，自責の思いについて記述した41名（20.7%）の文章

設問９　かっていた生き物が死んだときの気持
1．「なんで死んじゃったの」と思った。
2．ちゃんと世話をしていればよかったのに，かわいかったのに，どうして，たぶん，大きな金魚に食べられたんだと思いました。
3．もっと毎日あさとかに，えさをあげたり，すいそうをあらったりしたらよかったと思った。
4．ごめんね，とか，もうちょっと生きていてほしかったとかをくりかえすぐらいショックだった。
5．何で，死んだんだろう？。育て方が悪かったかな？。
6．メダカとかをおはかにうめて数日すると，ありとかがよってきてもっと大事に育てたかったと思った。
7．自分があまりせわをしていなかったから死んだのかなと思います。
8．ハムスターがしんで，その時かなしくてかなしくないていました。とてもかなしかったです。もっと，遊んでればよかったと思いました。
9．みじかい命なのになぁと思いました。なんで，とびだしたのだろう。なんでそんなむいみなことをするんだろう。
10. そのときは，とても悲しくてなみだがとまらなくて，ずっとないていた。ハムスター，いぬをかっていた。
11. 金魚はとても大きくなってて何年もいたからすごく悲しくて，思いだすとなみだがでた。（冬のときに寒かったから，お父さんがだんぼうつけていたら死んだ。）カブト虫とクワガタは赤ちゃんを生んでよう虫のときに死んだから庭にうめました。
12. 悲しかった。もう少しだいじにすればよかった。
13. お母さんにずっと育ててもらってたから，「自分も育てていたらよかったな」と思った。
14. かめをひろってだいじにそだてていたのに，とりに食べられていなくなった。そのときはしんぞうが一部分かけたみたいにかなしかった。あと，ハムスターとあそんでいたら，息がくるしくなって，しんじゃいました。おわりにおはかを作りました。わたしはなんで？　なんで？となきつづけました。
15. とても悲しい。ちゃんと育てないでごめんね。（犬，すずめ，クワガタ，カブトムシなど）
16. ぼくは，ネコをかっていて，ネコも命があって死んでしまったからかわいそうにおもいました。
17. もっと，あそんであげたかったし，いきものが死んじゃうならじぶんがしんだほうがよかったって思ってとてもないた。
18. 死ぬとゆうことは人間でも生き物でもつらいと思いました。ザリガニ，金魚
19. 自分がかっていた生き物が死んでしまって，せっかくここまでそだてていたのに早くしんでしまってさびしかったです。
20. 自分がかったせいで，死んでしまったから，かわいそうと思った。
21. 魚も人と一緒で，命があるから，すごく悲しかったです。（メダカ）
22. 悲しかった。かわいそう。「わたしが死なせたのかな」とうたがった。
23. 悲しい。？　かならずしぬ。くやしい。（せわのミスでしんでしまったから）さびしい。つらい。
24. 自分もいつかこうなるのかぁーと思ってかなしくなりました。
25. とてもかわいそうで，なんかさみしかった。もう，あわれないんだなぁ～と思った。
26. 犬がしんだときもうすがたをみたくなかった。（死んだすがた）
27. もっとおせわをしたかったけど，死んでしまったので悲しかった。
28. なんでしんだんだろうと思ったり，かなしいきもちになりました。
29. 生きている物なので，死ぬことは命を失うということだから，すごくかなしいし，次からもう生き物をかいたくないです。
30. おお泣きして自分の家族のいちいんが死んでしまったという気持ちがしました。どうして，私はこの子をかったんだろう，かわなかったらもっともっと長くいきていたかと思いました。
31. なきながらもっと大切に育てればよかったと自分に言いきかせた。
32. もうえさをやったりあそんだりできないんだなーとすーごく悲しい。
33. ６才ぐらいの時にそだてていて大きくなったカブト虫が好きだったけど，ハエに食べられて亡くなって悲しかった。
34. 一どしんだ人や生き物はちきゅうにはかえってきてあうことができないからさびしかった。
35. もうちょっとかわいがったらよかったなっと思う（ネコ）
36. 悲しかったし，しつれいだけど生き物は，必ず死ぬという事が勉強になった。
37. 何で死んだんだろうと思った。
38. なんでこんなにはやくしんじゃったの。（カメ）
39. かわいそうで，次もっと大事に育ててあげようと思った。
40. かっていた生き物が死んだときはびっくりもあったし，こわかったしほんとはそのとき，生き物が死んだら人もしぬんだ。
41. かっていた生き物が死んだら自分はすごくがっかりしたことがある。

表９－１　２年生の死の意識と喪失体験とのクロス表 N-228

質問事項		1.「人の死」			2.「家族の死」			3.「自分の死」		
		はい	いいえ	合計	ある	ない	合計	ある	ない	合計
4.「生き物の死」	ある	157(92.4%)	13(7.6%)	170(100%)	86(50.6%)	84(49.4%)	170(100%)	102(60.0%)	68(40.0%)	170(100%)
	ない	47(82.5%)	10(17.5%)	57(100%)	19(33.9%)	37(66.1%)	56(100%)	23(41.1%)	33(58.9%)	56(100%)
合　計		204(84.9%)	23(10.1%)	227(100%)	105(46.5%)	121(53.5%)	226(100%)	125(55.3%)	101(44.7%)	226(100%)
カイ二乗検定		＊			＊			＊		
5.「身近な人の死」	ある	50(84.7%)	9(15.3%)	59(100%)	33(55.9%)	26(44.1%)	59(100%)	39(66.1%)	20(33.9%)	59(100%)
	ない	155(91.7%)	14(8.3%)	169(100%)	73(43.5%)	95(56.5%)	168(100%)	87(51.8%)	81(48.2%)	168(100%)
合　計		205(89.9%)	23(10.1%)	228(100%)	106(46.7%)	121(53.3%)	227(100%)	126(55.5%)	101(44.5%)	227(100%)
カイ二乗検定		n.s.			n.s.			＋		

*p < .05　**p < .001

※質問事項　1.「人の死」とは，　設問「人は必ず死ぬと思いますか」を示す。
2.「家族の死」とは，　設問「家族がいつか死ぬことを考えたことがありますか」を示す。
3.「自分の死」とは，　設問「自分がいつか死ぬと考えた事がありますか」を示す。
4.「生き物の死」とは，　設問「かっていた生き物が死んだことがありますか」を示す。
5.「身近な人の死」とは，設問「今までにあなたのまわりの人がなくなったことがありますか」を示す。

表９－２　４年生の死の意識と喪失体験とのクロス表 N=198

質問事項		1.「人の死」			2.「家族の死」			3.「自分の死」		
		はい	いいえ	合計	ある	ない	合計	ある	ない	合計
4.「生き物の死」	ある	133(85.3%)	23(14.7%)	156(100%)	78(50.3%)	77(49.7%)	155(100%)	98(63.2%)	57(36.8%)	155(100%)
	ない	31(73.8%)	11(26.2%)	42(100%)	8(19.5%)	33(80.5%)	41(100%)	17(40.5%)	25(59.5%)	42(100%)
合　計		164(82.8%)	34(17.2%)	198(100%)	86(43.9%)	110(56.1%)	196(100%)	115(58.4%)	82(41.6%)	197(100%)
カイ二乗検定		n.s.			＊＊			＊		
5.「身近な人の死」	ある	110(84%)	21(16%)	131(100%)	56(43.4%)	73(56.6%)	129(100%)	76(57.7%)	55(42.3%)	130(100%)
	ない	52(81.3%)	12(18.1%)	64(100%)	29(45.3%)	35(54.7%)	64(100%)	38(59.4%)	26(40.6%)	64(100%)
合　計		162(83.1%)	33(16.9%)	195(100%)	85(44%)	108(56%)	193(100%)	113(58.2%)	81(41.8%)	194(100%)
カイ二乗検定		n.s.			n.s.			n.s.		

*p < .05　**p < .001

表９－３　６年生の死の意識と喪失体験とのクロス表　N=186

質問事項		1.「人の死」			2.「家族の死」			3.「自分の死」		
		はい	いいえ	合計	ある	ない	合計	ある	ない	合計
4.「生き物の死」	ある	122(86.5%)	19(13.5%)	141(100%)	80(56.7%)	61(43.3%)	141(100%)	104(73.8%)	37(26.2%)	141(100%)
	ない	41(91.1%)	4(8.9%)	45(100%)	27(60.0%)	18(40.0%)	45(100%)	34(75.6%)	11(24.2%)	45(100%)
合　計		163(87.6%)	23(12.4%)	186(100%)	107(57.5%)	79(42.5%)	186(100%)	138(74.2%)	48(25.8%)	186(100%)
カイ二乗検定		n.s.			n.s.			n.s.		
5.「身近な人の死」	ある	116(87.9%)	16(12.1%)	132(100%)	82(62.1%)	50(37.9%)	132(100%)	104(78.8%)	28(21.2%)	132(100%)
	ない	46(86.8%)	7(13.2%)	53(100%)	24(54.7%)	29(54.7%)	53(100%)	33(62.3%)	20(37.7%)	53(100%)
合　計		162(87.6%)	23(12.4%)	185(100%)	106(57.3%)	79(42.7%)	185(100%)	137(74.1%)	48(25.9%)	185(100%)
カイ二乗検定		n.s.			＊			＊		

*p < .05　**p < .001

=0.149 df=1 p>0.1)，「自分の死」(χ^2=0.058 df=1 p>0.1）において有意差が見られず，独立していることから仮説１は支持されなかった。

次に仮説２について，２年生では「身近な人の死」を体験した児童は，「人の死」(χ^2=2.34 df=1 p>0.1)，「家族の死」(χ^2=2.73 df=1 p>0.1)，「自分の死」(χ^2=3.62 df=1 0.5<p<0.1）において，有意差が見られなかったために関係性がみられず，仮説２は支持されなかった。４年生でも「身近な人の死」を体験した児童は，「人の死」(χ^2=0.226 df=1 p>0.1)，「家族の死」(χ^2=0.063 df=1 p>0.1)，「自分の死」(χ^2=0.050 df=1 p>0.1）で有意差が見られないことから，仮説２は支持されなかった。

6年生では「身近な人の死」を体験した児童は「家族の死」（χ^2=4.38 df=1 p<0.05），「自分の死」（χ^2=5.37 df=1 p<0.05）で有意差が見られ，仮説2の「身近な人の死」を体験した児童ほど「家族の死」「自分の死」を考えることが支持された。この結果と残差を見ると，6年生は「身近な人の死」を体験した児童はしなかった児童より「家族の死」「自分の死」について考えたことがあるといえる。

研究課題3　先行研究「死を考えた体験がある子どもは自尊感情が高い」の検証

小松が作成した自尊感情尺度の信頼性のα係数を算出したところ，調査1のA小学校4年生でα＝.747，6年生でα＝.760と信頼性の値が検証された。そこで，小松の自尊感情尺度，ローゼンバーグ（Rosenberg, M.）の全般的セルフエスティーム尺度並びにポープ（Pope, A.W.）らの子ども用5領域自尊心尺度（Five-Scale Test of Self-Esteem for Children）の家族の邦訳版を使用した分析結果は表10-1，10-2，10-3，10-4，に示す通りである。表10-1の4年生では，小松の自尊感情尺度はいずれの死についても「死を考えたことがない子ども」の平均値が高く有意な差があった。表10-2の6年生では，小松の自尊感情尺度はいずれの死においても有意差が見られず，「死を考えたことがない子ども」の平均値がわずかではあるが高い数値であった。小松の結果と異なり，4年生では，「死を考えたことがない子ども」の方が自尊感情が高く，6年生では死を考えたことの有無と自尊感情の高さとの間に有意な関係は認められなかった。したがって，小松の「死を考えた体験がある子どもは自尊感情が高い」という結論を導き出すに至らなかった。表10-3，10-4のローゼンバーグの全般的セルフエスティーム尺度では，4年生と6年生ともにいずれの死に対しても「考えたことがある子ども」と「考えたことがない子ども」との分析結果は，有意差が見られなかった。しかし，ポープの自尊心

表10－1　4年生 死を考えた子どもと小松の自尊感情尺度との関係性の分析結果　N=198

質問項目		「人の死」		「家族の死」		「自分の死」	
		はい	いいえ	ある	ない	ある	ない
小松の	平均値	27.1	29.1	26.1	28.6	26.6	28.7
自尊感情	標準偏差	4.78	4.28	5.14	4.16	5.04	4.05
尺度	人数	163	34	86	109	115	81
	F値	F(1,195)=4.85		F(1,193)=13.7		F(1,194)=9.27	
	p	*		＊＊		＊＊	

*p< .05　**p< .01

※質問項目
1．「人の死」とは，設問「人は必ず死ぬと思いますか」を示す。
2．「家族の死」とは，設問「家族がいつか死ぬことを考えたことがありますか」を示す。
3．「自分の死」とは，設問「自分がいつか死ぬと考えた事がありますか」を示す。

表10－2　6年生 死を考えた子どもと小松の自尊感情尺度との関係性の分析結果　N-=186

質問項目		「人の死」		「家族の死」		「自分の死」	
		はい	いいえ	ある	ない	ある	ない
小松の	平均値	26.6	28.2	26.5	27.2	26.6	27.3
自尊感情	標準偏差	4.81	5.70	4.85	5.06	4.81	5.33
尺度	人数	163	23	107	79	138	48
	F値	F(1,184)=2.19		F(1,184)=.99		F(1,184)=.65	
	p	n.s.		n.s.		n.s.	

*p< .05　**p< .01

尺度家族の測定値では4年生では3つのすべての死に対して，6年生では「自分の死」について「考えたことがある子ども」より「考えたことがない子ども」の平均値が高く，分析では有意差が見られた。

したがって，ローゼンバーグの全般的セルフエスティームとポープの自尊心尺度家族とにおいても，小松の「死を考えた体験のある子どもは自尊感情が高い」という結論を導き出せなかった。

表10－3　4年生　死を考えた子どもと自尊感情との関係性の結果（分散分析）N=198

質問項目		「人の死」		「家族の死」		「自分の死」	
		はい	いいえ	ある	ない	ある	ない
Rosenberg の全般的セルフエスティーム尺度	平均値	25.4	25.3	25.5	25.3	25.5	25.2
	標準偏差	2.41	1.93	2.45	2.23	2.60	1.89
	人数	162	33	84	109	113	81
	F値	F(1,193)=.02		F(1,191)=.25		F(1,192)=.9	
	p	n.s.		n.s.		n.s.	
Pope の自尊心尺度家族	平均値	31.3	33.6	30.0	32.9	30.4	33.5
	標準偏差	5.63	5.61	6.31	4.83	5.88	4.91
	人数	163	34	86	109	114	82
	F値	F(1,195)=4.71		F(1,193)=13.2		F(1,198)=14.9	
	p	*		**		**	

*p< .05　**p< .01

表10－4　6年生　死を考えた子どもと自尊感情との関係性の結果（分散分析）　N=186

質問項目		「人の死」		「家族の死」		「自分の死」	
		はい	いいえ	ある	ない	ある	ない
Rosenberg の全般的セルフエスティーム尺度	平均値	25.4	25.5	25.3	25.6	25.6	25.0
	標準偏差	2.17	2.73	1.85	2.70	2.18	2.40
	人数	161	23	107	77	137	47
	F値	F(1,182)=.004		F(1,182)=.67		F(1,182)=2.11	
	p	n.s.		n.s.		n.s.	
Pope の自尊心尺度家族	平均値	30.4	31.9	30.0	31.5	30.0	32.5
	標準偏差	6.38	7.31	6.38	6.60	6.33	6.69
	人数	162	23	106	79	138	47
	F値	F(1,183)=.99		F(1,183)=2.53		F(1,183)=5.4	
	p	n.s.		n.s.		*	

*p< .05　**p< .01

考察とまとめ

研究の目的は，児童の発達段階における死の意識と喪失感・喪失体験及び自尊感情との関係性について検証することにある。高木の「7歳でほぼ90%の児童が死の普遍性，絶対性を理解している」という研究報告があるが，研究課題1では，2・4・6年生の3学年ともに一般的な「人の死」に対してほぼ90%に近い数値を示し，解析においてもその差異は見られなかった。次に発達段階別に見ると，2・4年生に比べ，6年生ほど「家族の死」や「自分の死」を考えた児童が多いことがわかった。さらに，2・4年生より6年生の多くに生き物を死なせた体験からくる自責の思いが見られ，年齢が高くなるほど客観的に自分の行動を認識する傾向が見られた。

悲嘆の視点から見ると，6年生の61名（32.8%）が身近な人を亡くしたときの気持ちを家の人と話すことで，悲しみを共有し，癒していることが見られたが，小学校2年生では57名（25%）と，全体

に占める割合は少なかった。残りの児童はどのようにして，悲しみを受容し，乗り越えようとしているのであろうか。得丸らの小学校５年生から高校２年生までの1180名を対象にした「悲嘆を伴う死別に関する意識調査」によると，「半数を超える６割の児童・生徒がなんらかの悲嘆を伴う死別体験をしていること，中でも小学生の方が悲しみを伴う死別体験をしている」との調査結果を報告している。本研究においても同様の結果がみられ，得丸らも述べているように年齢が低くても児童の多くは親しい人を失う喪失を感じていることを，周りの大人特に保護者や教師は理解する必要があろう。

研究課題２の結果によると，小学校２・４・６年生の約75%の児童が「生き物の死」を体験していることが分かる。その死別の体験と死の意識との関係性についての仮説１「『生き物の死』を体験した児童ほど『人の死』『家族の死』『自分の死』を考える」は，学年が低いほど影響を受けていると見られる。得丸らはペットの死に対して小学校５・６年生（46.2%）が高校１・２年生（35.1%）との間に有意差が見られたことについて，「死別体験では，小学生はペットとの死別がもっとも多く，高校生はペットと祖父母の死別が同じ割合であった」と述べている。仮説２「『身近な人の死』を体験した児童ほど『人の死』『家族の死』『自分の死』を考える」は，２・４年生より６年生において，「身近な人の死」を体験した児童ほどしなかった児童より「家族の死」と「自分の死」を考えることが多いことが見られた。したがって，仮説１，２では低学年のうちは，「身近な人の死」よりも「生き物の死」が死の意識へ影響を及ぼしているが，高学年になると「身近な人の死」，特に２人称や１人称の死という自分との関わりを認識したところの喪失体験が死の意識に影響していることが読み取れる。したがって，小学校低学年では生き物の死を通したペットロスに触れる学習は可能であり，３人称，２人称，１人称へとつなげていくための導入部分ともなり得ると考える。さらに，６年生では，大曲（2008）が提唱する「自分と家族について考える死に関する学習プログラム授業」を実施することが可能であると考える。

研究課題３では，研究対象校Ｋ市立Ａ小学校のアンケート結果から「児童における死別体験の有無と自尊感情との関係性」を一般化できなかった理由として，小松の仮説はあくまでも「死を考えたことがあるか否か」という質問であり，そのことがどの自尊感情との関係性と結び付けて考えようとしているかが不明であることが考えられる。ポープら（2002）は，子どもの自尊感情を「社会，学業，家族，身体イメージ，全般の５つの領域からとらえることが有益である」と指摘している。そこで，小松の７つの自尊感情尺度を分類すると，「家族」（１．家庭の生活は楽しい。２．自分を大切に思ってくれている人に支えられている。），「学業」（３．学校の生活は楽しい。）「社会」（７．友だちにたよりにされる。），「全般」（４．目的に向かってがんばる。５．自分がすき。６．自分の意見がはっきり言える。）と，尺度には４つの要因が含まれていることから，「何の自尊感情尺度なのか」という検討が必要であろう。引き続き検証を試みるならば，今後の課題として，測定する自尊感情尺度の検討及びデータの収集と分析が必要である。

次に，ポープの自尊心尺度家族において「死を考えたことがない子ども」は「死を考えたことのある子ども」より，４年生では３項目全てで死の意識に有意差が見られた。６年生では「自分の死」に有意差が見られた。残りの「家族の死」「自分の死」の２項目の平均値は有意差こそ検出できなかっ

たが，平均値は 1 ポイント以上高かった。新藤（2001）は，父親・母親・自己の 3 者の関係性について，「10歳という時期に心理的変化が生じて今まで意識しなかった父母の関係性を意識し始める」と指摘していることから，研究対象を 4 年生以上に設定したことには妥当性があると考える。「死を考えたことがない子ども」の自尊感情が高いことについては，親子関係が良好なことに起因するのではないかと考えるが，更なる検証が求められる。

本研究について，研究課題 1 ～ 3 の考察を踏まえ総合的にまとめると，次の 3 点となる。1 点目は，小学校 2 ・ 4 ・ 6 年生と学年を追うに従い， 3 人称の死から， 2 人称の死， 1 人称の死へと死の意識の対象に変容が見られたことである。近藤（2003）によると， 6 年生のこの時期は「多くの子どもたちが死や命の意味を考える体験をする。（中略）身近な人の病気や死別の体験を素材にして，病気や障害，そして死について考えることも可能である」と述べているが，それを裏付ける分析結果となった。小学校低学年の児童でもすでに死別の悲しみを感じており，親や教師など周りの大人はそのことを充分に理解するとともに，適切な対応が必要である。2 点目は，「生き物の死」「身近な人の死」という死別体験は，児童の死の意識に影響を与えることである。特に，低学年の子どもほど「生き物の死」の体験が死の意識に影響を与えることから，小学校 1 年生で小さい生き物（例えば金魚やカブトムシなど）を飼うことは，死を正しくイメージすることを学ぶとともにペットロスという小さな別れの体験を重ねることによって，死を受容していくことができると考える。3 点目は，死の意識と自尊感情との関係性について論じるときに，「死を考えた体験」と自尊感情との関係性を問うことが可能かという仮説の検討がいるのではないかと考える。なぜなら，「死を考える体験」が必ずしも「死を肯定的にとらえる」または「否定的にとらえる」という子どもの内面性を問うことには繋がらない。体験の有無を問うことと自尊感情との関係性を導き出そうとすることは拙速ではないかと考える。

最後に，今回の研究では学校現場にアンケート調査を依頼したが，調査項目に「死」という言葉があることによって学校管理職の同意を得ることが難しく，データ収集が困難であったということをひと言記しておきたい。

引用文献

・赤澤正人2006.「第 4 章　児童の死の概念と死に対する意識」『いのちの教育の学校現場　における実践の可能性に関する研究』大阪大学大学院人間科学研究科　pp.35-51

・遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 1992.『セルフエスティームの心理学　自己価値の探求』　ナカニシヤ　p.264

・小松良子2003.「自尊感情を持ち，よりよい生き方を求める」『いのちの教育』実業之日本社　pp.142-157

・大曲美佐子・長井ゆかり 2008.「自分と家族について考える『死に関する授業』の構想」　『日本教科教育学会第31巻　第 3 号』日本教科教育学会　pp.9-18

・Pope, A.W., Mchale, S.M., Craighead, W.E. 1988.『Self-Esteem Enhancement with Children and Adolescents.』Pergamon Press（高山巌・佐藤正二・佐藤容子 1992.『自尊心の発達と認知行動療法　子どもの自信・自立・自主性をたかめる』岩崎学術出版 pp207-212 ）

・高木慶子2004.07.07「 7 歳ごろ死を理解　兵庫・生と死を考える会調査」神戸新聞

・得丸定子・吹山八重子 2005.「悲嘆に伴う死別に関する意識調査－小・中・高等学校の児童・生徒を対象にして－」『日本家庭科教育学会誌　第47巻第4号』日本家庭科教育学会　pp.358-367

・近藤卓　編2003「いのちの教育の実践と枠組み」『いのちの教育』p.32
・新藤克己2001「小学生の『家族イメージ』に関する研究」2000年度鳴門教育大学生徒指導コース修士論文

参考文献

・林みどり　2004.「子どもの自尊感情『子ども用領域自尊心尺度』邦訳版の検討」石川看護雑誌　pp25-29
・海老根理絵2008「死生観に関する研究の概観と展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要　第48巻』pp.193-202
・茎津智子他　2009.「小学生をもつ親が子どもと『死』について話すことの意識と実態」天使大学　紀要　Vol.9　pp.81-92
・大曲美佐子・石丸直子 2011.「小学校低学年を対象とした悲嘆教育の実践と死に関する学習プログラムの開発」『日本教科教育学会誌 第33巻　第 4 号』日本教科教育学会　pp.11-20
・内田知宏・上杢高志 2010.「Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討－　Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて」『東北大学大学院教育学科研究科　研究年報 第58集　第 2 号』pp.257-266
・大曲美佐子他　2012.3.「小学校2年生を対象に開発した死に関する学習プログラムを小学校 4 年生へ実践した授業報告」『日本教科教育学会誌　第34巻　第 4 号』日本教科教育学会　pp.39-48

大曲　美佐子

Correlation between awareness of death and experience of loss in relation to self-esteem in elementary school students

Misako Omagari

This study is to confirm advanced research that "children who have considered death have high self-esteem," as well as to verify relationship between awareness of death and experience of loss by death, by targeting second, fourth, and sixth grade elementary school students. Here, the following three points were obtained from the results of questionnaire survey. First, three out of four sixth grade students have thought about their own death, which is higher than that for second and fourth grade students. Second, according to analysis results, sixth grade students had developed a correlation between the experience of "death of someone close" and their awareness of death, and second grade students could experience the "death of a living creature." Third, according to Pope's self-esteem scale however, "children who have never thought about death," had higher self-esteem than "children who have thought about death," and a significant difference was observed. From this, even children in lower elementary school grades can feel the loss of a pet, and the adults around them should provide an appropriate response, by fully understanding this point. Moreover, future tasks in the verification of the relationship between awareness of death and self-esteem in the advanced research include further data collection and analysis.

Key terms: death of a human being, death of a family member, death of oneself,
experience of loss , self-esteem